

公爵家に生まれて初日に
跡継ぎ失格の烙印を押され
今日も元気に生きてます！
6

ましたが

登場人物紹介

エトワ

風の公爵家の令嬢。
魔力がほぼないので跡継ぎ失格の
烙印を押されてしまった。
元は普通の日本人で
かなりのマイペース。

ダリア

シルフィール公爵家の夫人。
魔法の素質がない娘(エトワ)を
産んでしまったことから、
貴族社会での嘲笑を恐れ、
地方の別荘に引きこもっている。

アグラ

十三騎士のメンバーの一人。
『最悪の騎士』という
二つ名を持つ。

天輝

金の鳥をかたどった剣。
エトワの能力の大半が
封じられている、
頼れる相棒。

ハナコ

魔王の娘。
エトワの友人で、第三王子の
アルセルさまに片想い中。

護衛の子供たち



クリュート



ミント



ソフィア



スリゼル



リンクス

目次

第一章	○ッ○ルペンシルさん	7
第二章	最悪の騎士	11
第三章	どぼん	47
第四章	マルセイユ・ルーレット	68
第五章	霧の中	81
第六章	手料理	95
第七章	出会い	113
第八章	やらかし先輩騎士	133
第九章	お母さん	153
第十章	天輝さんの分大盛りにしておきますね	172
第十一章	これから	183
第十二章	○ッ○ルペンシルさん奮闘記	197
おまけの章	みんなでTRPG	214

第一章 ○ッ○ルペンシルさん

本日はお日柄もよく、みなさまいかがお過ごしでしょうか。エトワです。

現代の日本から異世界に転生してただいま十歳、小等部四年生。名門貴族で風の魔法を扱う名家シルフィール公爵家に生まれたものの、魔法の素質がゼロで初日に廃嫡^{はいちやく}。

でも、なんだかんだ十五歳までは面倒を見てもらえるみたいです。

そんな私と一緒に暮らしているのは、後継者失格になった私の代わりに、シルフィール公爵家の跡継ぎ候補に選ばれた五人の子供たち。みんな一癖^{ひとこぼ}あるけど、いい子ばかりです……うん……そのはず。

そんな五人の子供たちに試験として与えられたのが、私を仮の主^{あるじ}として守護するという護衛役と呼ばれる使命。でも、もともと後継者失格の私には守る価値なんてないし、その代わりに守れという感じで預かったお宝とある事故で私が台無しにしちゃったし、もうこのお役目自体だいたいぶぐだぐだになっている気がします。

でも、目的は後継者候補の子たちの結束を高めることみたいだから、そんな感じでいいのかな？ 一方、私のほうと言えば、冒険者学校に入学したり、エトワ商会を立ち上げて異世界でのアル

ミホイルの普及に励んだり、そこはかとなく楽しく過ごしております。

最近はお世話になった学校の先輩、パイシェン先輩が卒業。護衛役の一人、ソフィアちゃんが生徒会長に就任して、生徒会活動の一環として魔法学校セイフォールの見学に行きました。

セイフォールでは生徒会の友人のデート計画を手伝っていたら、吸血鬼を名乗る変態に襲われていろいろ大変でした……

そんなトラブルもすったもんだで解決し、友達のデートも成功(?)させて、ルヴェンドに戻ってきた私ですが、今は一人で散歩しているところです。

本来、護衛役の子たちが一人か二人ついてきてくれるんだけど、先ほど言ったようにもう必要ない役目だし、あの子たちの活動の邪魔をしたくないので、一人でそろーりと抜け出してきました。

それに、今日はやりたいことがあるしね。

木漏れ日が降り注ぐ森の中を、私はすすすと進んでいく。

やってきたのは、見晴らしのいい丘の上。

木々が途切れた天然の展望台から、ルヴェンド全体の景色が、とは残念ながら見えないが、それなりにいい感じの町の景色が一望できる。

今日は晴れていて、頬を撫でる風はちょうどよく涼しい感じ。小高いところから町を眺めてリラックス日和だ。

私は右手を掲げて、彼女を呼び出す。

「○○ルペンシルさん！」

私の右手に白くてつるつとした細長いペンが現れる。

これが彼女こと○○ルペンシルさんだ。

彼女は私がこの異世界に転生したとき、一緒にこの世界にやってきた存在である。もう少し詳しく話すと、生まれ変わるための泉に飛び込んだときに、うっかり握りっぱなしにしてこの世界に連れてきてしまったのだ。

それからは、ずっと私と一緒にこの世界で生きている。

本来、○○パッド付属のペンとして仕事を続けるはずだった彼女が、この状況をどう思っているかはわからない。でも、私は彼女にもこの世界を楽しんでほしくて、たまにこうして呼び出して、一緒に景色を眺めたりしている。

「今日はいいい天気だね。○○ルペンシルさん」

○○ルペンシルさんは私の右手にのって、一緒に町の景色を眺めている。白くてかっこいいその姿は、私にしゃべりかけてはくれないけれど、なんとなく喜んでくれている感じがする。気のせいかもしれないけれど。

「あつ！ あそこの木の看板の建物、途中で寄ったパン屋さんだよ！ おいしかったね！ またいこうね！」

○○ルペンシルさんの性別は正味わからない。

でも、きつと女の子だと思う！ なんとなく！ 根拠はないけれど！

夢みたいな話だけど、いつか彼女がしゃべれるようになったら一緒にガールズトークしてみたい

なあ。

「秋になったら、この場所から見える紅葉は綺麗だろうねえ。また来ようね、○ッ○ルペンシルさん」

白く綺麗な日差しの中、○ッ○ルペンシルさんは私の声に応えるように、きらきらと輝いていた。

第二章 最悪の騎士

十三騎士のメンバーに、自分たちの中で『最強は誰か』と聞けば、全員がこう答えるだろう。リーダーであるベリオルだと。

しかし、そのベリオルは第二王子ルースの誕生会で起きた、魔族の襲撃により重傷を負い、未だに戦線に復帰できていなかった。

回復魔法も決して万能ではない。怪我の度合いが重すぎたり治療をするまでに時間が経っていたりすると、治しきれなかったり後遺症が残ったりすることがある。ただし、ベリオルは最高位の回復魔法による治療を受けられたはずだった。それでも、ここまで復帰が遅れているのは、魔族が持つある力が原因だと噂うわさされている。

『蝕むさみ』と呼ばれる特殊な力。

上位の魔族でもごく稀にしか持っていないと言われるその力は、傷の回復を阻害し、その魔族が生きている限り、傷を受けた者を苦しめ続ける。

王宮の高官たちは、ベリオルの復帰は無理だと諦めあきら、次の十三騎士のリーダーは誰が務めるのかを、議題に挙げ始めているらしい——十三騎士のメンバーはそんなことは認めていないが。

では、十三騎士のメンバーにベリオルの次に強い者は誰かと問えば、おそらく答えは分かれるだ

ろう。

一番、多くの者から名前が挙がると考えられているのはロックスラントだ。その保有する魔力の大きさはベリオルを上回り、まだ若く精神的に未熟と言われながらも、いずれは十三騎士のリーダーになると目^もざれている逸材だ。

あるいは歴戦の魔法戦士であるケイを挙げる者もいるだろう。

すでに五十を越えたベテランだが、その能力と経験に疑問を抱く者はいない。ベリオル不在の今は、十三騎士のまとめ役もしている。

中にはディナを挙げる者もいるかもしれない。十三騎士では一番の新人で、総合的な実力は劣るのだが、当たれば一撃必殺の魔法は高い評価を得ている。

他にもいろんな名前が挙がるだろう。彼らの魔法は多彩で様々な評価は難しい。

しかし、もし自分が戦うとして一番嫌な相手は——そう質問すると、答えは一つに収束していく。『最悪の騎士』、その二つ名で呼ばれる十三騎士の古参メンバーの一人。

——名はアグラ。

* * *

十三騎士が集まる会議室では、ある事件が大きな話題になっていた。エトワと自称吸血鬼が森で戦った、あの件だ。

「先日、アルグランツ近辺の森で行われた大規模な戦闘。戦場の破壊跡の調査や目撃情報から、都市壊滅級の力を持つ存在二体による戦闘だと推測されている。両者が使っている魔法や能力は一切不明。その正体——おそらくどちらも魔族だろうが——目的もすべて不明」

人類が使う魔法と魔族が使う魔法は、外見的特徴や必要な素養、その構成に関わる技術によって明確に違うものとして区別されている。魔法を知らない者でもわかりやすいのは、魔族が魔法を使うときは中空に魔法陣が浮かび上がる現象だろう。

魔法が使われたあとでも、その痕^{あと}を分析すれば人間か魔族のどちらが魔法を使ったかはわかってしまう。ただこの見分け方には一つの問題があった。

魔族が必ずしも「魔族の魔法」を使うとは限らないことだ。

そもそも魔族とは、人間と比肩する知能や魔力を持った様々な種族をざっくりとまとめた呼称である。その能力もそれぞれ異なっていて、一般的な魔族が使う魔法、つまり「魔族の魔法」とは技術体系が異なる魔法を使う者もいれば、そもそも魔法ですらない異能の力を振るう者もいる。

よって人間側からすると、「人間の魔法」以外のほぼすべてを魔族の仕業^{しわざ}として見なしているというのが実情である。例外として、平民の英雄たちが使う力、魔法剣や再生力^{リジェネレート}などが存在するが……

そういう実情があり、今回の事件も「魔族の魔法」の痕跡は確認できなかったが、人間の魔法を使った痕跡もないので、魔族の仕業^{しわざ}と見なしているという状況だった。ベリオル不在の十三騎士のまとめ役をしているケイがため息をつく。

「はあ、最近の魔族の動向はまったく理解ができません。いきなりクララクを襲ったり、ルース殿下の誕生会ではベリオル殿を襲撃したり。今度は町の近くに出没して魔族同士で地形を変える規模の戦闘か……。これらに繋がりがあるのか、それとも関係のない魔族がそれぞれ起こした事件なのか……」

「あのパーティーでは魔王の配下を名乗る魔族が現れたらしいですね」

「それも何が本当で何が嘘やら」

突然、起きた魔族同士の抗争。しかも、わざわざ被害の出ない森で都市壊滅級の力をぶつけ合ったのである。その原因を探れなんて、雲を掴むような話だった。

十三騎士たちもお手上げである。

まさかただの学校の研究員が貴族の少女をストーカーしたことから起こったトラブルが、あんな大規模な戦闘に繋がったなどと誰もわかるはずがないのだが……

しかし、ほとんどのメンバーが投げやりに議論を交わす中で、何かを察した表情をしている二人がいた。十三騎士の中でも若手に属するディナとガーウィンだ。

ディナは空間を操る魔法使いであり、エトワと交戦した経験があった。彼女は目撃情報に目を通すと、戦いの特徴からその片方が誰かわかってしまったという顔をした。それを横目で見ていたガーウィンも、ディナのリアクションを見て何かを察し、まずいなという顔になった。

気まずそうに周りで話し合う年長者たちの様子を窺った二人だが、その不審なリアクションに気づいた者はいないようだった。

二人はホッとすると、そのまま黙って会議をやり過ごす。

会議が終わり、人がいなくなってから、ようやく二人は話し始めた。

「使ってる力から見て、たぶんあの子みたいっすね」

「俺はあの子の戦闘そのものは見たことないが、お前から聞いた話からしてそうなのだろう」

ディナがエトワと接触したのは、影呪の塔とルース殿下の誕生会の二度。特に影呪の塔では本気の戦闘になっている。光の刃を飛ばし、魔法を切断する戦闘スタイルで、都市壊滅級の敵と渡り合う。そんなことができるのはあの子しかない。

ガーウィンはルース殿下の誕生会で、エトワとがつぶり組み合い、投げ飛ばされただけだったが、その後ディナからエトワの話聞かされていた。

二人ともエトワという名前は知らないが、その存在は認知していた。

「でも、よく黙っててくれましたね」

ディナがガーウィンに言う。

ディナ自身はなんというか、成り行きであの塔で接触した子のことを十三騎士の人間たちに秘密にしている。一応助けてもらった恩があるし、今さら報告しても面倒なことになりそうだったからだ。

十三騎士としてどうなのよって話でもあるが、ディナが十三騎士になったのは金のためだ。危険な仕事だが、その分一気にお金を稼げる。パツと稼いで、気楽でやりたい放題の引退生活を送るのが目標だ。

だから、そこまで組織に義理立てする気はない。クビにならない程度に、仕事をこなさせていければいい。

しかし、ガーウィンにはそもそも秘密にする理由がない。ただ、例の少女に変に絡んでいつて投げ飛ばされただけの変人だからだ。

「お前は秘密にする決めているのだろう？ それならば俺も守るまでだ」

ガーウィンは腕を組みながら、そう言い切る。

（またわけのわからない理屈を……）

こういう理解できない思考をするから、この先輩は苦手だ、とディナは思う。

組んだ腕から無意味に主張する筋肉の固まりも苦手だけど……と追加で思いながら。

それでもディナがガーウィンと一緒にいるのは、十三騎士の中でも彼は比較的、付き合いやすい部類にあるからだった。

「それに俺も一度ぶつかり合つてみたが、悪い存在には思えなかった」

ガーウィンが報告を避けたのは、ディナがそうしているからという理由だけではなく、彼自身も例の少女が悪い存在ではないという予感があつたからだ。

その予感を抜きにしても、いきなりとびかかった自分に殺傷力のある反撃をせず、投げ飛ばすことを選び、その後は推測ではあるが、王女に襲いかかった三体の魔族を撃退しベリオルを救出してくれているのだ。客観的に見ても悪い存在ではない、ガーウィンはそんなことを冷静に考えていた。

「とりあえず、今回も魔族から町を守つただけに見えますし、あの子のことは秘密にしておきましょう。本人も学生として暮らしたいみたいすからね」

「うむ、承知した」

エトワのことを秘密にすることに合意した二人。

しかし、その背後にいつの間にか小柄で髪の高い、少女のような外見の騎士が立っていた。

「ほう、お前たち面白い話をしてるな」

それが誰かを認識した瞬間、ディナだけでなく、ガーウィンの顔まで真っ青になる。

「げっ、アグラ先輩!？」

「アグラ!!」

「ほれ、わたしにも聞かせてみよ」

アグラは少女のような外見でありながら、老婆のような口調で話す。

そんなアグラを前に、外見は遥かに大人なはずの二人が動揺を隠しきれない。

「い、いやそんな面白い話じゃないつす……。来週観に行く劇の話をしてただけで!」

「そう、そうだ! 楽しみだなあ。俺もディナも最近観劇にはまってな。ああ、楽しみだあ!!」

無理にでもごまかそうとする二人。

しかし、そんなバレバレの嘘も追及することなく、アグラは口元に歪な笑みを浮かべ、自分より背の高い二人を見下すように笑って、宣言した。

「まあ、お前たちの『意志』などもはや関係ないがのう」

そう言うとき彼女は指を下に向け、何かの魔法を発動した。

* * *

エトワの護衛役の一人、クリュートが朝起きてダイニングに行くと、啞然とする光景が広がっていた。

食卓に広がる芋畑、ではさすがにないけれど、これでもかと芋料理が並んでいる。

マッシュポテトに、ベーコンとじゃがいもの炒め物、じゃがいものスープ。それからこれまたじゃがいもを使った料理クロケット。なんとなく目について、名前が思い浮かんだのがそれだけという話で、まだテーブルには名前もわからない料理がたくさんあった。

「やつほー、おつはよー、クリュートくん！ いい朝だねえー！」

「なんですか……この食卓は……」

うざいエトワの挨拶は無視して、その食卓の惨状に口元を引きつらせる。

公爵家の朝食といえば、贅沢品ではないけど、お抱えの腕の良い料理人が作った質が良く、バランスも取れた料理が提供されていたのだ。

しかし、今日はひたすら芋、芋、芋。もはや芋の暴力である。

なんなんだ、この惨状は。

すると、この屋敷に移ってからずっと一緒に過ごしてきた馴染みの侍女がニコニコしながら

言った。

「エトワさまがお友達からたくさんじゃがいもをいただいてきてくださったんですよ。それで今朝はじゃがいもづくしをすることになりました。エトワさまもお料理を手伝ってくださいてくださいたんです」

（よ、余計なことをおお……）

クリュートは内心呻いた。

（雇った料理人がちゃんと僕たちを飽きさせないように、毎日献立を考えて作ってくれてるんだ。いちいち、僕らが無駄な手間をはらって、質を下げにいく必要なんかないだろ）

一応決まりごとでは彼女の護衛役だから、表立った反抗はしないけど、十五歳まで限定の、不本意ながらの仮主人を不満げに秘かに睨む。その仮主人は相変わらずのアホ面で、ポウルと木鉢を持ってマッシュポテトをぐりぐりと増産していた。

しかも、クリュートの視線に気づいたらしく、こちらを見返して、意味不明に親指をぐつと立ててくる。

イラッときた。

（量は増やさなくていいんだよ！ 僕が欲しいのは質だ！ 貴族らしく嗜みのある質！ 余計なことするな！）

しかし、芋づくしに不満なクリュートの気持ちに反して、周囲の反応は好意的だった。

「私も久しぶりに挑戦的な料理ができました。エトワさまの料理の発想は、少し変わっていて面白

いものばかりです。刺激になります」

お抱えの料理人も満足げに微笑んでいる。

日々、まとまりのある、悪く言えば保守的な料理を作る生活に、フラストレーションみたいなものが溜まっていたらしい。

「エトワさまの手料理！」

「おかわり！」

「うむ……いける……」

いつもの三人はもう食卓について、料理をばくばく食べている。

「そんなに芋料理を食べると太るぞ……」

なんか自分だけが不満を持つてみたいで悔しくてそう言ってみただけ。

「太る……なぜだ……？」

「どうして太るんですか？」

「そういえば太るってどうやるんだろうな。今まで太れたことがない」

ちゃんと毎日体重を測って、増えたときには食べるのを我慢して、周囲から評判の良い容姿と体型を保っているクリュートとしては、腹が立つ答えが三人から返ってきた。

「エトワさまの手料理はとても美味おいしいです。食べさせていただけることに感動です」

スリゼルも笑顔で、エトワを褒め称えている。

まあ、こいつの場合、他の三人と違って大して口を付けてないけど……

「さあさあ、クリュートくんも召し上がれー！」

エトワがうつとうしくクリュートの背中にまわりついて、席に着かせる。

クリュートはげんなりした顔で言った。

「僕、朝は軽いのがいいんですけど」

朝に口に入れるものはさつと食べられて、胃に残らないものがいい。クリュートの理想の朝食は、断じてこの重そうな芋づくしではない。

「またまたー、夜更かし始めた中学生みたいなこと言っちゃってー」

エトワの返答は意味がわからなかった。

そのまま、強引にグイグイとクリュートを食卓に着かせてしまう。

「でも、それならクリュートくんにはこれかな！」

どんつとクリュートの前に置かれたのは、謎の煮物だった。

じゃがいもににんじん、それから透明度の高いパスタみたいなものに、少量の細切れの肉が入っている。

「なんですかこれ……」

「肉じゃが！ 異世界風だよ！ 似た調味料や食品を探すのががんばりました！ そのしらははコックさんに相談して特別に作ってもらったんだよ！」

力こぶを作ってそんなことを述べるエトワに、クリュートは『また頭が沸いたようなことを……』と思った。この仮の主は、聞き流していると理解しづらいことを話すが、たまにきちんと



聞いていても意味不明なことをしゃべり出す。

今回がそうだ。言ってることが何もかもわからない。

まともな説明を受けることを諦めたクリュートは、恐る恐るわけのわからない煮物に手を付けた。フォークでじゃがいもを刺して口に入れると、独特の甘みのある味付けが口に広がる。

（野菜^{やば}つたい味ですね……）

典型的な田舎料理だ。じゃがいもや他の野菜がごろごろと入っていて、見た目からしてまず洗練されてない。見た目通りに味も野菜^{やば}つたくて、華が感じられず、不細工な感じがする。

ちようど、これを作った本人とそっくりかもしれない。

（でもまあ食べられないことはないな……）

文句を言うのもめんどくさくなって、その煮物だけ口に運ぶクリュートを、エトワはニコニコと見ていた。かまうとまたうつつというくらいからクリュートは無視した。

* * *

いつも通り、ルーヴ・ロゼで午前の授業を受けたあと、ボムチョム小学校に足に向けたエトワは呟いた。

「それにしても、あんなにじゃがいもをもらってしまおうとはねえ」

魔法学校セイフォールの周辺で起きた自称吸血鬼のストーカーとの戦闘。そのストーカーに力を

与えていた存在は、魔王が警戒する遺物の一つだったようなのだ。

それを退治したエトワは、魔王に感謝され、贈り物をもらうことになった。ファンタジー小説なら、こういうときもらえるのは伝説の武具だったりする。だからエトワは少しワクワクしながら袋を開けたのだった。

そして中に入っていたのはじゃがいもだったのである。一緒に入っていた手紙には、『最近魔王城内で栽培したものです。ぜひ、ご賞味ください』と書いてあった。

それを見たエトワは『魔王領は平和でいいなあ』と思った。

「うん、じゃがいもはいいものだけだね。久しぶりにソフィアちゃんたちに料理を振る舞えたい嬉しかったよ。……でも、あの量を送るのはやめてほしいね」

袋いっぱいじゃがいもの処理は、一人暮らしの人間なら大変なことになっただろう。

公爵家には育ち盛りの子供たちと、使用人たちがいたから良かったけど。

『魔王側が平和なのは良いことだろう。あちら側まで緊急の事態になるようなトラブルが起これば、人間の領域はもっと危険なことになるのは間違いない』

「そだねえ」

エトワは天輝^{てんき}さんの言葉にもっともだと同意した。

そんなエトワの心眼^{マントアイ}が、道の先で倒れているおばあさんを見つける。

「だいじょうぶですかー！」

エトワは彼女の特徴である間伸びした声でおばあさんに駆け寄った。

怪我や病気だろうかと観察してみると、膝をついているが、外傷は見当たらず、気分が悪い様子もない。何かにつまずいてしまったのだろうか。

「痛いところはありますか？ 歩けますか？」

エトワは手を差し伸べて、おばあさんを助け起こそうとする。まだ小学生の小さな体だが、支えぐらいにはなれるはずだ。

おばあさんはエトワの手を借りながら、ゆっくりと立ち上がった。

「ありがとうね、お嬢さん。すっかり足が悪くなっちゃってしまっただねえ」

「いえいえ」

エトワはおばあさんの買い物袋が地面に投げ出されてしまっていることに気づいた。すぐにそれを拾うと、買い物袋から溢^{あふ}れてしまった果物なんかを集めていく。

全部、拾い集め終えると買い物袋は重くなった。両手でぐっと持つ。

「おばあちゃんの家は近くですか？ 荷物は私が運びますよ」

「ええ、いいのかい？」

「はい！」

たぶん、ポムチョム小学校の授業には遅刻してしまうだろうけど、良いことをしたのだからウィークマン先生ならきつと許してくれるはず。エトワはそう思う。

エトワは雑談しながら、おばあさんのお家を目指す。

「そうかい、冒険者学校の生徒さんなのかい」

「はい」

「あれ、でもその制服は……」

「あ、ルーヴ・ロゼにも通ってるんです」

「もしかして貴族のお嬢さまなのかい？」

「いえ、そうではないんですけど、縁があって通わせてもらってるんです」

失格の子の噂を知っていれば、エトワの額の印を見て、その正体に気づいたかもしれない。しかし、おばあさんは目が悪くなっているのか、それに気づく様子すらなかった。もしくは額に変な落書きをしている子供として、スルーされているのかもしれない。

「そうなのかい。不思議な子なんだねえ」

おばあさんはそう言いながら、なぜか大きなため息をついた。

エトワは心配になってたずねる。

「どうかしたんですか？ 何か悩みがあるならお聞きしますよ？」

「お嬢さん、助けた上に年寄りの愚痴を聞いてもらうことになるけどいいのかい？ この町からずっと東に行ったところに、ルーペドルンって地方があるんだけどね」

エトワはその地方について聞き覚えがあった。屋敷で誰かが話しているのを聞いた記憶がある。確か景色の綺麗な場所で、貴族の静養などに使われることがあると。

「そこに一人息子が住んでるんだけど、最近、正体不明の魔族が出るようになったらしくてね」

「魔族ですか!？」

エトワはびっくりした。

彼らの領域である北方と接していることから、この国では魔族の被害をたびたび受けている。けれど、それは魔族の領域と国境が接している場所に多い。

ルーペドルンは国の南東部にある。どちらかというと安全と考えられている領域だった。

そんな場所に魔族が出たなんて……

もちろん、ありえない話ではない。魔族の脅威の一つは知能が高く、姿や能力次第では人間社会にも潜伏できてしまう点にある。エトワが住む国ではないが、三十年間勤めていた大臣が実は魔族だったなんて話が残っている国もある。

それ以外にも、意外な場所に出没して被害を出したという例は枚挙にいとまがない。

最近で言うなら、ルース殿下の誕生会を狙った襲撃は予想不可能な場所に出現した例だった。

それとエトワは、ハナコやハチがちよくちよくルヴェンドに観光気分で遊びに来ていることも知っていた。

そう考えると、ルーペドルンに魔族が現れたというおばあさんの話も驚くべきことではないのかもしれない。

「国にも報告してるんだけど、なかなか対処してくれないらしくてねえ。恐ろしくて眠れないと手紙で伝えてきてるんだよ」

「そうなんですか、それは心配ですね」

おばあさんはそこまで話すと、エトワに対して申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんね、お嬢ちゃんにこんな話をしてもしょうがないのに」

「いえ、私にも貴族の知り合いがいるので、今度伝えてみますね。もしかしたら、何か働きかけてもらえるかもしれません」

そういう魔族事件への対処は、国の騎士団が貴族の仕事だった。特にエトワの父であるクロスウエルが率いる風の派閥は、魔族が起こす事件に対して積極的に戦力を派遣するスタンスである。

話せばきつと何かしてくれるだろうし、情報をもらえるだろうと思った。

「おやおや、ありがとうね」

おばあさんがエトワに微笑み、お礼を言ったところで家に着いた。

「それじゃあ、おばあちゃん、お元気でー！」

「ありがとうね、助かったわ」

玄関に荷物を置いて、おばあさんに頭を下げてさよならをする。

エトワが家を去ったあと、おばあさんは玄関を開め、あれつと首を傾げた。

「あら、私いつの間に帰ってきたのかしら……」

買い物に出かけて、誰かに話しかけられて、そこから記憶がない。

もしかして買物の途中で帰ってきてしまったのだろうか。そう思つて玄関を見渡すと、しっかりと荷物が入った買い物袋が置かれていた。

それなのに買い物をして、家に帰ってくるまでのことが思い出せない。歳をとつて、物覚えが悪くなつてしまったのだろうか。

それとなぜだろうか、さつきまでとても小柄な女の子と、話していた気がする……

しばらく首を傾げて悩んでいたおばあさんだったが、諦めたようにふつと微笑んだ。

不思議なこともあるものだ。でも長い人生だ、そういうことも起こるのかもしれない。

それよりももうすぐ嬉しいことがあるのだ。くよくよ悩んでいる場合ではない。

「さうて、明日は一人息子が嫁を連れて、西のアイルポート地方から来るんだ。腕によりをかけて料理を作つてやらないとね」

おばあさんは微笑みながら、買い物袋を持って台所へ向かった。

数日後、エトワはルヴェンドの屋敷の応接間で大人の男と話していた。

「エトワさまのお話を聞いたあと、ルーペドルン地方における魔族の目撃情報を調べたのですが、ここ数年何もありませんでした。駐在している者に再調査を命じたのですが、現状魔族が現れたという話は掴めていません」

「そうですか、ありがとうございます」

報告してくれた男性にエトワは丁寧な頭を下げた。

この男性は風の派閥の一員で、魔族の調査や情報の整理などを担当している。

エトワとは面識があり、古都クララクでのヴェムフラムとの戦いで、アルセルを助けにきてくれた風の派閥の一人がこの人だった。そのときの縁で、顔を合わせたら挨拶したり世間話をしたりする間柄になっている。

「見かけた人間が国に報告してない可能性も否定はできませんが、この国でも有数の平和な場所ですからね。何かが起きれば、すぐに噂になると思います。それにあそこにはダ……」

男性は何かを言いかけて、それからエトワのほうを見て、しまったという表情をした。

エトワもそれに気づいて心の中で首を傾げたが、言いたくないこともあるだろうと追求することはしなかった。

「公爵家の別荘がありますから、風の派閥の人間がいつも駐在しています。何か事件が起きても、対処は早いと思いますよ。お伝えできるのは以上になります。エトワさまがご不安でしたら、さらに追加の調査も予定しています」

「いえいえ、大丈夫です。私も噂話を聞いた程度だったので。しっかりと対応していただきありがとうございます。安心しました」

エトワはもう一度、深々とおじぎをした。

風の派閥の人たちはいろいろと仕事があつて忙しい。エトワの父親——公には父親と呼べる関係ではないが——クロスウェルも仕事で国中を飛び回っていて、なかなか家には帰ってこない。

自分が又聞きただけの不確定な情報のために、これ以上、風の派閥の人間の労力を割かせるわけにはいかなかった。

「いえ、また何か困ったことがあつたら、いつでも言ってください。それでは」

結局、彼にしてみたら子供の話に振り回されただけだったので、笑顔でそう言うのと帰っていった。いい人だなあ、とエトワは思った。

部屋に残ったエトワは首を傾げる。

「それにしても変な話だねえ」

『ああ、そうだな』

エトワの言葉に相槌を打ったのは、エトワの中に存在する天輝という剣の人格だった。エトワが神さまから与えられたもので、普段はエトワが持つ力の大半をその中に封印している。

ルーペドルンに魔族がいるという情報。二人がこの情報を何かの勘違いと片付けられないのには理由があつた。

それはおばあさんにこの話を聞いて以降、同じような話をちよくちよく耳にするようになったからだつた。

町を歩いているときにすれ違う行人たちの噂話から。買い物をしているときに店主とお客の会話から。学校の帰り道に井戸端会議している主婦たちの世間話から。

話の細部は微妙に違うものの、『ルーペドルンで魔族が出た』という情報だけは共通していたのである。

まるで病気が伝染していくかのように、町中にこの噂話が広がっていた。

それなのに、この情報を手に入れているのはエトワの周りでは彼女だけなのである。あんなに頻繁に耳に入るほど噂話になつているのに、エトワの通う冒険者学校ボムチョム小学校の生徒たちも、護衛役の子供たちも、まったく知らなかった。

「これはもう、私が直接行つて調べるしかないかもね」

『しかし、怪しいぞこれは。この噂話はまるで標的でも存在するように、不均一な伝わり方をしている。そしてこの情報を入手している以上、お前がその標的である可能性を否定できない』

「うーん、でも、もしかしたら本当に魔族がいて、困ってる人がいるかも。行ってみるよ」

エトワとしては、怪しい話であつてもなくても、自分が行くのが一番いい方法に思えた。

嘘ならば、他の人の手をこれ以上煩わせるわけにはいかないし、本当ならばなおさら周りの人やソフィアちゃんたちを巻き込むわけにはいかない。

そういう意味では、きな臭ければきな臭いほど、自分で行くしかない。

「今度の日曜日かな。土曜はハナコと会う約束しているし」

『私はお前に危険なことに首を突っ込んでほしくないのだがな』

天輝がため息をつく気配がエトワに伝わってきた。

「わかる。私もソフィアちゃんたちに対して同じ気持ちだから」

天輝さんの気持ちよくわかるよと、エトワはうんうんと理解を示した。天輝は二回目のため息をついた。心配のタネである張本人に共感だけ示されても困るのである。

結局、エトワが怪しい現場であるルーペドルンに行くことは変わらず、天輝も最終的にはエトワの意思を尊重すべきだとしてそれ以上は何も言わなかった。

方針が決まり、エトワは部屋を出る。すると護衛役の一人、リンクスの姿が目飛び込んできた。リンクスは赤い髪の強気な印象の少年である。四歳ぐらいのころはヤンチャな子だったけど、今は落ち着いている。昔はワルだった元不良少年みたいな変貌を幼児期から小学生までで達成してし

まった子である。

彼は廊下のソファに寝そべり本を読んでいた。

（うーん、どうしたんだろう）

リンクスが使っているソファは、応接間の手前に配置されているものだった。来客が応接前に待機するときに使ったりするもので、普段のリンクスの行動パターンでは、決して利用しないソファだった。

エトワがそれとなくリンクスを観察すると、リンクスもこちらを窺っている気配が伝わってきた。リンクスの自身に対する想いに気づいていないエトワは、自分が風の派閥の男性（そこそこイケメン）と、親しげに挨拶を交わして応接間に入っていたことが、リンクスの注意をものすごく引いてしまったことには気づかなかった。

「んー」と言いながらトテトテと近寄っても、リンクスは無関心なふりをしてずっと本を見ている。

エトワの口元に、にんまりとした笑みが浮かんだ。

「わあー！ ざぶとーん！」

エトワはそのまま、リンクスの背中に折り重なるように飛び込んだ。

「うわああっ！」

近づいてるのは気づいてたのに、好きな女の子から予想外の接触をされて、リンクスが顔を真っ赤にして叫ぶ。

「リンクスくんやーリンクスくんやあー！ よーしょーしー！」

「やめろーっ！ やめろつて！」

エトワはそのままハイテンションで、赤面するリンクスに背後から思いつきりじやれつきまくった。

* * *

土曜日、エトワはハナコに会いに来ていた。

ハナコはエトワの友人の魔族の少女である。魔王の娘という人間界に正体がバレたら大騒ぎになる境遇だが、本人はいたっておバカ寄りの普通の少女であり、のんきに人間界の王子さまアルセルさまに恋をしている。

彼女とエトワが待ち合わせしたのは、人気のないルヴェンドのはずれの森だ。

学校交流で忙しかったので、ハナコに会うのも一ヶ月ぶりぐらいだった。

「エトワー、どうだー、どうだー」

ハナコはエトワの前で、暗めのオレンジ色のボレロに、白いシャツ、落ち着いた淡い青色のロングスカートという格好でポーズを取っていた。

ポーズといってもおおげさなものじゃなくて、目の前でくるくる動いて、スカートをひらひらさせている。

最近、というかここ一年、ハナコは「おしゃれ」を学び始めたのだ。

もちろん、理由はアルセルの気を惹くためだった。

エトワやソフィアから、最新の人間のファッションを教えてもらったり、自分でも『こーでねーと』で見せてきたりする。茶色い薄汚れたぼろぼろのローブを着ていたところと比べると、すごい進歩だった。

「うゝむ」

エトワは糸のように細い目を、悩めるファッションリーダーっぽくして、ハナコの格好をじっと眺める。

正直、悪くはない、とエトワは思う。ちょこつと田舎っぽい感じは否めないけど、それはそれで可愛い。そもそもハナコはなんだかんだ美少女で、どんな服を着てもそれなりに見える。

しかし――

アルセルさまの周りは、美少女がかなり多い。

学年が近くてよく一緒にいるシーシェさまはぶつちぎりの美少女だし、エトワとも親しいパイシェン先輩も幼いころからの知り合いでかなり可愛い、超美少女のソフィアちゃんだってアルセルとの関係は悪くない。

それ以外の桜貴会むぎかいの女性たちもかなり可愛いし、それを言うなら、ルーフ・ロゼは全体的に顔面偏差値がそもそも高い。そういうわけで、ハナコのライバルになりかねない人たちはたくさんいるのだった。

ハナコが彼女たちに勝って、アルセルさまを射止めるためには、厳しいファッションチェックが

必要だろう、とエトワは考えた。

「とりあえず、一番悪いのは靴かな」

エトワが指差した先にあつたのは、黒く長い毛がもさもさと生えた靴だった。暖かそうだったけど、涼しげな田舎娘風のファッションとは致命的に合っていない。

服は結構うまく着こなせるようになってきたけど、こういうとこに、まだファッションに慣れない部分が出てくるかもしれない。

「靴かー？ そんな気になるものかー？」

「おしやれは足もとからと言いますしお寿司」

エトワは前世でみたファッションチェック番組で聞いたような、それっぽいことを言ってみる。

「な、なるほどっ」

ハナコもわかっているのかわかってないのか、感心した表情で頷いた。

「そういえば、家を出たとき、靴だけそのまま来てたな。でも、他に靴なんて持っていないし」ハナコの住む北の城は、雪が降っている寒い地方だった。だから、こういう靴が一般的なのだろう。

「ふっふっふ、そう思ってたよ。これをお履きなさい」

エトワがそう言ったらハナコに渡したのは茶色のロングブーツだった。

厚手ではあるけど、明るい色合いで、黒い毛の生えた靴よりも、ハナコの今の格好に合っていた。エトワが数ヶ月前まで履いていたものでお下がりだ。

「おおー、いつもありがとなー」

ブーツをプレゼントされたハナコは、嬉しそうな顔ですぐにそれに履き替える。

現在、人間を脅かさないという魔王の方針によって、慎重しく暮らしている魔王領では、ファッション用品というのも手に入りづらかった。なので、おしやれをしたいハナコにはエトワやソフィアが洋服をプレゼントしたりしている。

ハナコは最初と同じように、エトワの前でくるくるして見せた。

「どうだー」

「うんうん、似合ってる似合ってる。かわいいかわいい」

エトワも優しく褒めてあげる。

それから、エトワとハナコは、いくつかの古着を受け渡ししたあと、一緒にお昼ごはんを食べた。人間の町に行くのはリスクが高いので、ハナコが食べたようなものをエトワが屋台からテイクアウトしてあげた。

人間の町の屋台のサンドイッチを食べながら、ハナコはちよつと憂鬱そうにため息をついた。

「はあ、アルセルさまにもこの姿、見せたかったなあ……」

ハナコのアルセルさまへの片思いは、もう一年以上続いていた。ほぼ、一目ぼれだったのここまで続いたことに、エトワは驚きながらも、その想いを少しずつ認めつつある。

ただアルセルさまのほうはと言うと、さすがに歳が離れているせいか、ハナコをそういう対象としては見ていない。優しい人だから魔族と人間の垣根を越えて、仲良くしてくれてるけど、その扱

いは妹や下級生の子に対するものだ。

最近、エトワの周りではルイシェン先輩とユウフィちゃんという歳の差があるカップルができたけど、ハナコがそれを聞いたらうらやましがるかもしれない。

「最近、また忙しいらしいからねえ。でも、時間ができたら会いに来てくれると思うから、そのときに見せてあげたいよ。きつと可愛いって言ってくれるよ」

エトワはハナコを励ます。

ハナコもそれを想像したのか、すぐに口元をゆるませてうんと頷いた。性格が単純だから、励ますのも簡単だった。

「そういえば、じゃがいもどうだった？ おとーさまとオレたちで育てたんだぞ」

「あー、うん、美味しかったよ。魔王さまにもお礼を伝えておいてください。『非常に美味しかったです』って」

（さすがに量が多すぎたけど……）

エトワは本音を隠し、ハナコたちにお礼を伝えた。

実際、ハナコが持つてきてくれたじゃがいもは、寒い地方で育ったからか、身が締まっていて美味い！と好評だった。ただ、量が多かったので、公爵家の別邸にいる人、総出で食べなければ、しばらくじゃがいも生活になるとこだった。

どんなに美味しいものでも、同じ食事の生活は辛い。エトワは前世でカレーを作りすぎて、一週間カレー生活になったときのことを思い出していた。

「そっかー、じゃあまた取れたら持つてくるな」

「あ、さすがにあれだけたくさんもらうのは悪いので、今度は少なめをお願いします」

「任せろー！」

わかっているのかわかってないのか、ハナコは勢いよく手を挙げた。

今度持つてきたらハチに半分ぐらい持つて帰らせればいいやと、エトワは思った。

* * *

ハナコと会った次の日、私は噂のループドルンまで来ていた。

「綺麗な場所だねえ、天輝さん」

『私に人間のような感性はないが、情報を照らし合わせると確かにそのような場所だ』

「いやいや、天輝さんって結構人間臭いし、いつかわかると思うよ」

『理解不能だ』

ふふふ。

ループドルンは溪谷地帯みたいだ。

白い岩肌の切り立った崖がそこかしこにあって、その間を流れの激しい川が走っている。いくつも連なっている大小の滝は見たえが十分だった。そんな岩場にはたくさん緑が生い茂っていて、前いた世界だとテレビでしか見たことがないそんな場所だった。

実際に来てみると、滝から出る水しぶきのおかげか涼しくて、澄んだ空気も美味しくて、とてもいい場所だ。

「とりあえず、何も手がかりがないし、歩き回ってみようか」
私たちはそこらへんを歩き回ってみる。

整備されてないので道は悪いけど、力を解放してるので問題なく歩ける。

景色が綺麗で、トラブル探というより、森林浴みたいになってしまった。

「うーん、平和なことだねえ」

しばらく歩き回ってみただけど、特に変な気配もない。

『ああ、魔族どころか小さな魔物すら一度も遭遇しない。この世界でもかなり安全な場所に入ってるう』

天輝さんからお墨付きをもらった。

『そもそも人家が少ないようだ。見つけた建物にも、恒常的に人が暮らしている気配はなかった』
「別荘みたいな感じで使われてるってことかなあ」

歩き回って見つけた家のいくつかは、作りは豪華だったけど、人の気配はしなかった。

作りは小さめだったけど、貴族の別荘なんじゃないかと思う。土地が隆起してるから、大きな建物は建てにくいみたいだ。

もう少し探索すれば、村や町が見つかるかもしれないけど、今のところ、小さな集落すら見つからなかった。

『どうする？　そもそもの話に信憑性がなくなってきたぞ。戻るか』

「うーん」

おばあさんの話によると、ここらへんの村に住んでる息子さんが苦しんでるらしいけど、申し訳ないが少し怪しい話になってきた。おばあさんの嘘だったのかもしれない。その場合、なんで嘘をつかれたのか意図がわからない。

もちろん本当の可能性だってある。私がその村を見つけれないのかもしれない。

「もうちょっと探索してみっ——」

そう天輝さんに伝えた瞬間、木の陰から三体の人型が飛び出してきた。

シルエットは人型だけど、赤黒い岩のような肌で、手には子供の身長ぐらいはある長い爪を生やしている。

『魔族だ』

「本当にいた!？」

私はびっくりして、目を見開いてしまった。

魔族たちはそのまま私に襲いかかってくる。

何か呪文を詠唱し、瞬時に魔法陣を展開させ、何十個もの岩のかたまりを私に飛ばしてきた。

「ひょいっと」

私はその間を縫って、魔族に接近すると、一匹を切りつける。

魔族はあっさりとその一撃で倒れた。

残り二体が驚いた表情で目を見開くのを見たあと、その二体も横なぎに切りつけた。あっさりと残りの二体も倒れる。

「本当にいたんだね……」

私は自分が倒した三匹の魔族を、まじまじと見てしまった。

さっきまで何かの誤報だったのではって方向に気持ちが傾いていたので、いざ魔族に遭遇すると驚いてしまった。

『むう……』

天輝さんも同じ気持ちだったようで、うなり声が聞こえてきた。

『うまく確認できなかったが、この魔族たち……少し気配がおかしかった気がする』

「おかしかった？」

『私の感知能力の範囲ではない……だが……』

「勘みたいな感じ？」

天輝さんが勘で何かを言うってちょっと珍しいかも。

私がそう思っていると、背後からいきなり誰かの声が聞こえた。

「なるほど、『病的情報』^{アイズオブイン}にて誘い出し、それなりに力のある魔族をぶつけたつもりじゃったが、ここまであっさり屠^{ほぶ}られるとは」

たぶん私と同じ年ぐらいの少女の声。

だけど、なんか妙に古めかしいしゃべり方をしている。

「人にも魔族にも属さぬ不明なその力、この国にとって危険すぎる」

私は少女の姿をきよろきよろと探す。

だけど、声は聞こえてくるのに、女の子の姿はどこにも見当たらない。

「天輝さん、わかる？」

天輝さんにたずねたけど、返ってきたのは少しの沈黙と、そのあとの鋭い声だった。

『……………逃げろ、エトワ！』

「えっ？」

いつにない焦った声に、私は思わず聞き返してしまう。

『お前にとって最悪の相手だ！ こいつが使うのはおそろくつ——』

そこでいきなり、ブツツて音が聞こえて、ラジオのスイッチが切れたときのように天輝さんの声が聞こえなくなる。

「天輝さん!? 天輝さん!？」

心配になった私は、何度か心の中に問いかける。

なのに、天輝さんの返事はない。こんなこと初めてだ。

いったい、何が……。さっきから聞こえてくる女の子の声が原因……？

『認識^{アノヴァ}解除』

そんな詠唱^{えいしょう}が聞こえてきて、私の前に女の子が現れた。

黒い髪をした鋭い目つきの、髪の高い女の子。だけど、その顔にはリリーシイちゃんやポムチョ

ム小学校の子たちみたいな幼さはなくて、むしろ年齢を重ねたおばあさんのような老成した雰囲気を纏っている。

服装も普通の女の子が着るようなドレスじゃなく、騎士みたいに鎧を着けていた。

私は女の子に話しかける。

天輝さんには逃げろって言われたけど、天輝さんの無事を確認しない限り、この場所から逃げるわけにはいかない。

「あのっ、天輝さんに何をしたんですか！ いきなり声が聞こえなくなったんですけど！ あなたが何かしたんですか!?」

一生懸命抗議するけど、女の子は私の話など聞いてないように呟く。

「なるほど、さっきので精神を消し飛ばしたと思ったが、二つの精神をもっているのか。本当に謎めいた力だ」

消し飛ばした？

どういうこと……!? それって天輝さんをつてこと……!?

いや、落ち着かないと。

天輝さんがいない今、私がしつかりしないと……。

「あ、あの、それって戻せるんですか！ 私の大切な半身で友達で家族なんです！ も、戻してくれませんか！」

とにかく、天輝さんに何かをした目の前の相手と、交渉するしかなかった。



もし……手遅れだったら……ううん、無事だって信じるしかない。

「もし、私に何か要求があるなら、何でもしますから！」

「わしの要求は簡単じゃ。人の身には過ぎたるその力、封させてもらう」

女の子が剣を抜き私に突きつけた。

私は防御するために、剣を横に構える。

でも、その剣は攻撃をすることなく、私の胸の前で止まった。

そして少女が呪文を唱えるのが聞こえた。

『マインドブラスト
精神崩壊』

なにあし？ お

て き

さ

第三章 どぼん

アグラは目の前に倒れたエトワを見つめた。

人間の魔法や、魔族が持つ魔法や異能、そのどれにも属さない力。

いったい、どうやってこんな力を手に入れたのかはわからない。

遺跡から生み出されたのか、それともまったく別の場所から来たのか、見当がつかなかった。だ

からこそ、放置しておくには危険すぎた。

約束があった——アグラには。遥か昔に、この国の王と交わした約束。

その王はもう生きてはいないけれど……

この国の守り手となり、あらゆる危険を排除し、命の限り守り続けると——

だから、今回も放っておくわけにはいかなかった。

アグラはエトワに、一歩ずつ近づいていく。

そして膝をつき、エトワの小さな体を、アグラの小さな背中に背負おうとする。

「その力を忘れ、普通の子供として平穏に生きていくが良い」

アグラはエトワを、少し離れた場所にある村に運ぶつもりだった。

そこはそれなりに豊かで、心優しい者たちが暮らしている村だった。記憶をなくした少女がいて、

引き取ってほしいとあらかじめ話をつけていた。その村に住む老夫婦が引き取ってくれると約束してくれた。

もちろん、大人になるまで育ててもらう費用として、しっかりと金銭も渡しておくつもりだ。力も記憶も失った少女は、そのままその村で普通の人として暮らし、きつと幸せに生涯を終えることができるだろう。

アグラがエトワの体に手を触れたとき――

アグラはエトワの額の紋章に気がつく。

「そういえば、公爵家から失格の烙印を押された娘だったか……。ひどいことをする……」

その顔が一瞬、同情に歪んだ。

しかし、このままでは村に預けても、いずれ公爵家に情報が伝わってしまう。

額の印は何人であろうと消してはいけないと、公爵家からの通達で決まっていた。国王の次に権力を持つ、公爵家の通達である。

それは法律と同等、いや状況によつてはそれ以上の効力があつた。

「だが、それは人の理だ。わしには関係ない」

そう言うアグラは、エトワの額に手をかざした。そして呪文を唱える。

『認識障害』

すると、エトワの額の印が周囲から見えなくなった。

アグラはエトワの額を撫でて咥く。

「効力は三年ぐらいか……。ちゃんと定期的に様子は見に行く。安心するがよい。お主は何も知らず、幸せにその生の一刻を過ごせばよい」

そう言うて優しげに咥くと、エトワの体を背負った。

そして村へ向け、一步一步、歩き出す。

その足は、ルーペドルンの自然豊かな大地を踏みしめ、川沿いの綺麗な苔の生えた岩場に足を乗せ、こけた。

「あぎやつ!」

つるんどシンぼちゃん。

正面からもろに転んだアグラは、顔面を思いつき岩場に打ち付ける。

「いだけだだあー」

打ち付けた顔を赤くし、涙目になりながらアグラは立ち上がる。

そしてそこで、大切な背中の重みがなくなっていることに気づいた。そこには力を封じるために、記憶を失わせた少女がいたはず。いたはずだったのだが――

「えっ、えっ、あれ?」

状況がわからず、アグラはきよきよと周囲を見回した。

しかし、背中に負っていたはずの少女の姿はどこにも見当たらない。

周囲に見えるのは、岩場と、森と、勢いよく流れる川だけ。

少女一人ならわりとあつさり流せてしまいそうな川だけ。

「あれっ……？」

アグラは源流の勢いのまま、気持ちよく下流へ流れていく川の水を、呆然と見つめながら再び、あれっ（おどろ）と咤（おどろ）く。

それから一瞬、正気を取り戻したように動き出すと、小走りであつた川を下つてみる。すると、その先には滝があつた。谷の下層へ向けて、気持ちよく水を噴き出すそこその規模の滝が。そしてエトワの姿は、当然どこにも見当たらない。

「あれえ………？」

三度の、あれ、が出た。

その全身からすごい量の汗が吹き出し始めている。もしかしてまずいことをやつちやいました？——そんな風にその場で小首を傾げている。

アグラが最悪の騎士と呼ばれるのには、三つの理由があつた。

一つはその能力の凶悪さ。精神操作に特化した魔法は、対処が厄介であり、その効力もえげつない。十三騎士（さんじきし）ですら対峙（たいじ）するのを忌避（きひ）する。

二つめはその独善的な性格。自分の判断を絶対だと信じ、周囲の意見を聞こうとしない。ときには国のルールすら破る、独断専行の常習犯であつた。

そして三つ目の理由は——

ドジなのである。何をやらせても、何を任せても、しょうもないミスばかり起こす。生粋のトランプメーカーなのだ。つまり、自分の判断で独自の行動を始めては、必ず何かボカをやらかし、

十三騎士にとって厄介ごとを運んでくる。

もともと厄介者（やっかいもの）揃いの十三騎士からすら厄介者扱いされる、厄介者中の厄介者なのである。

だからアグラは十三騎士たちから呼ばれていた、最悪の騎士と。

ちなみに最悪の騎士は、比較的優しいほうのあだ名だつた。本人の前で呼んでも支障がないように、公称はこれで通っていた。

他にも彼女には、十三騎士たちがそれぞれつけたあだ名がある。

『十三騎士の産業廃棄物』『いるよりはいないほうがマシ』『十三騎士の足かせ担当』『マイナス十三人力』『今のところ我が国と戦争している国はないが、あいつは存在しないはずの敵国から送られてきたスパイ』『十三騎士に三名ほど人員を追加してほしい。彼女に何もさせない係と、彼女の尻拭いをする係と、彼女の代わりに働く係を』『ただのゴミ』『いや迷惑なゴミ』などなど。

そんな十三騎士きつての役立たずは、勢いよく流れる川の前で、小さな声で咤（おどろ）いた。

「え、えつとお……。どうしようお……。？　これえ……。どうしようお……。？」

そんなこと言っても誰かが答えてくれるはずもなく、その小さな咤（おどろ）きは、ルーペドルンを吹くさわやかな風に消えていった。

* * *

「ダリアさま、フィレットさまからお茶会のお誘いが届いています。出席しませんか？」